

いを付け加えれば、膨大な史料と真摯に向き合い、地道な研究を積み重ねつつ、大きな問いに対して答えを出そうと挑む、才気ある新しい世代が登場したことへの喜びである。大変な苦難の末に本書を書き上げた著者の、今後益々の活躍を心から願うばかりである。

(久末亮一・日本貿易振興機構アジア経済研究所)

鍋倉咲希、『止まり木としてのゲストハウス——モビリティと時限的つながりの社会学』晃洋書房、2024、iii+244+15p.

本書は、ゲストハウスという一時滞在の時空間において、観光客たちが旅行先における出会いとコミュニケーションを通じて構築する一時的な社会関係の様相をテーマとする、民族誌的著作である。すなわち「観光客の民族誌」である——そのことが本書の最大の特徴であり、独自性の核心を成している。

1970年代から盛んになってきた観光人類学や観光社会学においては、数カ月から年単位で特定の観光地をフィールドワークした民族誌的著作が、蓄積されてきた。ただしそのほとんどは、観光地に居住し働く「ホスト」たちの職業実践に、描写・考察の焦点を置いてきた。これは、ある観光地からみて、そこにやってくる観光客はあくまでも数日程度の短期滞在者に過ぎない、という人間集合の特質に大きく関わる。入れ替わり立ち替わりして日々顔ぶれが変化する観光客という対象は、調査者からすると長期的かつ継続的なコンタクトが取りづらい。ゆえに、参与的なフィールドワークという調査手法と相性が悪いのである。観光を構成するステークホルダーは大きく、観光客（および市場）、観光業（従事者や経営者）、地域（住民や自治体や関連産業）の三者に分類できる。有名観光（地）を描いた従前の民族誌的著作は、その元となる調査が長期的で参与的であるほど、観光業を主役に据える傾向が強かった。その場合、地域の諸アクターは環境を構築する要素として、そして観光客は主役が「対応する」相手として、描かれることになる。観光を産業/ビジネスとして

捉える視点からすれば、その行為主体はやはりサービスを提供/販売して売上を立てる「ホスト」となり、カネを払ってサービスを受ける/買う側の観光客はあくまでもその「ゲスト」でしかない。ゆえに既存の民族誌的著作は、「ゲスト」を取り上げるにあたってはおしなべて、「ホスト」との相互作用を重点的に描いてきたのであった。

旅先での人との触れ合いが時に旅の感動を増幅してくれることを、我々は経験から知っている。しかし多くの場合それは、旅先の景観や文化や活動を楽しむ上での付随物、スパイスや隠し味のようなものとして、軽く見られては来なかったか。我々にとって重要なのは、あくまでも普段から恒常的に関わり所属する組織や社会関係であって、旅行先での一時的な人との関わりなどは恥と同じように「かきすてる」程度の価値しかない——こうした従来の先入観を批判するところから、本書は始まる。綿密な先行研究レビューが展開される序章と第一章で著者が強調するのは、スマートフォンを手放せない現代人は、物理的にはある特定の場所に常駐・在住する日々を送るなかでも、その生きている社会空間/関係は、広大な地理的範囲を重層的にカバーしているという事実である。今日、多くの人びとはその職業生活上の必要から移動の機会が増えて、「オン・ザ・ムーブの状態において、空港や駅、飛行機、電車、バス、ホテル、レストランなどの移動の中継地点にとどまる際に、ある種の共同性やつながりを感じることもある」（p.27）。今日の人びとの生活を理解する上で、こうした「オン・ザ・ムーブ」を通り過ぎていく様々な人間/社会関係は、少なくとも総体的には無視できない比重を占めていよう。本書が着目する、観光旅行先でゲストハウス滞在者たちが形作る一時的に親密な社会関係は、ごく短期の人との関わりが当事者にとって深い意味を持ち得るという点で、その興味深い事例のひとつだと言える。

本書が注目するゲストハウスという場所は、今日、国内外の移動者を支えるインフラとして機能する宿泊施設であり、そこでは観光者同士の積極的な交流をみることができる。人びとはゲストハウスを舞台に、旅先で見知ら

ぬ他者と出会い、ともに集って交流を行い、濃密な時間を過ごす。これは国内外を問わず、多くのゲストハウスでよく見られる光景だ。興味深いのはそうして築かれる旅先の関係性が、たいてい数日間しか続かないという点である。観光者の移動によって生成する関係は、同じように観光者の移動によって消失する一時的なものでしかない。こうしたかわりは、鳥などの動物がふと立ち寄っては離れていく「止まり木」のようなゲストハウスの性格を示すものである。(pp. 1-2)

アンコール・ワット遺跡への拠点として名高いカンボジア第二の都市、シェムリアップに6軒ほどあるという「日本人観光客が集うゲストハウス」のうちの一軒に、著者は2019年11月から2020年の3月にかけて、「宿の手伝いをするかわりに食費や宿泊料金などの滞在費が免除される仕組み」(p. 54)を利用して住み込み、宿のスタッフとしての立場で参与的調査を実施した。ちなみにこれは著者に特別な話ではなく、こうした「フリーアコモデーション」などの「制度を活用して旅行者はホスト/ゲストの立場を越境しながら柔軟に移動を行っている」(p. 54)のだという。著者は、「オン・ザ・ムーブの利根的なかかわりの実相を明らかにし、その社会的意味を探るための手段」(p. 43)として、「人びとが身体的に『居合わせる』状態に注目」(p. 43)する。すなわち「身体的な移動によって一時的に同じ空間を共有する“だけ”のことが、いかなる共同性/つながりを生み、人びとにどのような作用をもたらすのか」という問いが設定され、続く各章における考察を通して、「その場限りのゆるやかなつながりこそが、他者との多様で豊かな関係性に開かれている」(p. 43)ことが、示されていくことになる。

大衆観光が隆盛を極める今日、国境を越える越えなにかかわらず、宿泊を伴う娯楽目的の旅を楽しむ人の数は、世界で年間延べ数百億人にのぼるだろう。その中には、旅先で印象的な出会いに恵まれる人もあろうが、割合としては決して多くは無いはずだ。むしろ、上に引用した如きの旅人同士の濃密な関係など、大多数の観光客には無縁

だろう。本書は、カンボジアの人気観光地のシェムリアップに立地する日本人ゲストハウス、といういささか特殊な宿泊施設を調査対象に選択したことで、そこに宿泊する「ゲスト」同士の相互作用を、観光旅行の重要な構成要素として浮かび上がらせる。

第二次大戦後、欧米の若者を中心に、旅行生活に必要な全てを担いで東南アジアを安く長く旅する「バックパッカー」の旅が人気を博するようになった。インターネットの無い時代、バンコクなどを出入り口とする自国からの往復航空券のみを事前購入し、目的地も宿泊施設も決めず、東南アジア各国をいきあたりばったりで陸路で移動する。タイ、ベトナム、ラオス、カンボジアなどのインドシナ半島周遊は、バックパッカーたちから最も人気のあるルートのひとつであった。旅費の節約を重んじる彼らのニーズを満たすべく、従来型のホテルとは異なる安宿、すなわち「ドミトリ」と共有スペースが存在し、水回り設備が共同利用され、素泊まりの宿泊が可能という機能的特徴を持つ施設」(p. 58)であるゲストハウスが、雨後の竹の子のようにインドシナ半島全域に設立されていった。ゲストハウスは、疲れた旅人の身体を休めるだけでなく、旅行者同士が自国語や英語で語らう場を提供し、また旅の情報交換所としての機能も果たした。インターネットが普及する以前は、ゲストハウスに置かれた情報交換ノートや滞在者の口コミなどが、次なる目的地や宿泊先を計画する上で、重要な情報源となっていたのだ。情報収集ツールとしてはスマートフォンが圧倒的な支持を得ている今日でも、最も身近でホットな情報を交換できる場としてのゲストハウスの機能は、失われていない。このあたり、バックパッカーの歴史とその研究史は、本書を読むための基礎知識として、第二章にまとめられている。

第二章第三節から第三章にかけては、本書が主たる考察の対象とするゲストハウスにおける宿泊客同士の関係について、いかなるセッティングにおいてどういう関係構築がなされているのか、具体的な事実が提示される。本書の記述を読むと、評者が若い頃(1990年代)に実践していたような、大学の夏期休暇を丸々旅行に費やして、爪に火を

灯するような資金の使い方をしながら、一人で小さな冒険に挑戦したり、逆に一カ所にひたすら長期滞在したりといった旅のスタイルは、時代遅れであることが強くうかがえる。まず本書の舞台となる「日本人向けゲストハウス」宿泊料金はドミトリーで600～2,500円程度だが、シェムリアップのゲストハウスとしては割高の部類となるらしい。それでも「日本人のオーナーやスタッフ [中略] つねに滞在している事による日本語のサポート, [中略] 多様なサービスや宿の清潔さ, そして交流の充実など」(p. 73) が強みとなって、日本人客を惹き付けているという。ゲストハウスを訪れる観光客は、「なるべく安価に旅行することを志向しつつも、漂流や現地化の性格は薄れ、必ずしも長期に旅行をするわけではない」(p. 70)。主な顧客層としては、「大学の長期休業中は大学生が多く、ゴールデンウィークや年末年始は休暇を取った社会人の姿が見られる」(p. 71) という。これら繁忙期以外の時期は「会社を転職・求職している二〇代後半以上人びとが中心」となる。一人あたりの滞在日数は、繁忙期は2～4泊程度、閑散期にはそれが少し長めになる傾向があるとのことだ。

著者は、日本人向けゲストハウスの特徴として「交流」機会の多さを強調する。欧米における交通機関やビーチなどでの雑踏に関する先行研究は、その場の社会的秩序を成立させる要素として他人同士でいるための「(ゴフマンの言う) 儀礼的無関心」を抽出しているが、著者によれば「他方でゲストハウスは『他人同士』のままでいることを許してくれない [中略] むしろ『他人同士』を積極的に結びつけ、関与に方向付けていく力が働いている」(p. 90) のだという。そのあたりの詳細描写が本書の真骨頂なのだが、紙幅の都合上、詳しくは紹介できない。ざっくりと言えば第一には、安普請の狭い空間に詰め込まれた二段ベッド、水回りを共有するというドミトリーの物理的なしつらえが、自分と共存する他者の存在感を強調する。そして第二に、どのゲストハウスにも例外なく設けられている、共有スペース。すなわち、複数のテーブルと椅子にソファ、場合によってはレストランやバーを兼ねるようなスペースが、ゲストハウスの一階にある。居住スペース（特にドミト

リー）が貧弱なゲストハウスにおいては、自室にこもらずに共有スペースでくつろいだり飲食したりする傾向が総じて強まる。のみならず、ゲストハウスの経営側（オーナーやスタッフ）が意識的に「正月やクリスマスなどの季節のイベントやカレー、バーベキューなどの食事イベント、そのほか周年記念や宿泊者の誕生日祝いなどのイベント」(p. 116) を設けたり、共有スペースに居合わせた滞在者同士の会話を繋いだりして、戦略的に「宿泊者同士の交流の円滑化」(p. 119) を図っている。またゲストハウスが催行する、近隣に点在する遺跡などへの日帰りツアーへと宿泊者を誘うことも、結果として交流の活性化に寄与しているという。いずれにせよ、こうした「演出家/黒子」としてのオーナーやスタッフの働きもあって、元々交流を志向する人びとは積極的に、そうでない人びともある程度には、数日間という短い滞在でありながらも宿泊者同士の交流に巻き込まれていくことになる。

続く第四章と第五章は、本書の主たる考察部分となり、上述したような交流の当事者にとっての意味が、解きほぐされていく。第四章の冒頭で著者が強調するのは、ゲストハウスでの宿泊者たちの交流が、表面的な親密性や盛り上がりを見せるだけでなく、当事者たちにとっては人生を豊かにするような価値ある出会いとして受け止められることもある、という事実である。数日前に知り合った知人が宿を後にするのを涙で見送るのだ、ゲストハウスでの出会いへの感謝を綴ったポエムを宿帳に書き残していくのだ、なぜそんなに短い人間関係にそこまで心理的に入り込めるのか、評者にはにわかに共感しがたいエピソードが複数紹介されているが、著者によれば、むしろ始めから短期間に限定された出会いだからこそ、ある種の純粋なコミットが可能になるのだという。個人を取り巻くすべての人間関係がSNSを通じて社会的に可視化されてしまう今日、人からの評価を意識せずに人と繋がることそれ自体を純粋に楽しむことが、我々には難しくなっている。対して、ゲストハウスという非日常の場において紡がれる「時限的つながりは、出会った相手との関係の継続が義務づけられていないという意味で、観光者に『厄介さ』

からの解放をもたらし、その場のつながりへの没入を容易にさせ[中略]さらに、つながりが一時的となるからこそ、他者とつながることそのものの楽しみが維持され」(p.168)るのである。

第五章で著者は、ゲストハウスの滞在者のうちでも特に「何もしない観光客」に、着目する。ここでいう「何もしない」滞在の特徴とは、「第一に、流動的な観光者との時限的交流を楽しんでいること、第二に、部屋にこもらずゲストハウスの周辺をうろろろしていること、第三に『何もしない』ことである」(p.187)と、著者は整理する。そして、そのうちの第二と第三の観点から、他の宿泊者たちとの「時限的つながりや濃密な交流にかかわる次元だけでなく、ただそこにとどまることによって他者との身体的な共在を引き受け続けるという共在の次元が存在すること」を、明らかにする。「何もしていない」ように見えてその実、彼らは二段ベッドの上下をシェアすること、共有スペースの端と端に座っていること、各種イベントに積極参加はしないまでもその隅に身を置くことなどを通じて、言語的・対面的なコミュニケーションに能動性をもって参与せずとも、「ひとりぼっち」にならずに済んでいる。「孤立と連帯の両方を求める観光者にとって、現代のゲストハウスは他者を感じつつも『何もしない』ことが許される場所として機能していると考えられる」(p.204)。

職場でも学校でも、家族や友人関係、さらには恋愛・結婚まで、社会のあらゆる局面においてコミュニケーション能力の重要性が叫ばれる現代社会にあって、周囲の人間と殊更にコミュニケーションを取らずとも断絶する心配の無い状況は、最高の贅沢なのかも知れない。さらに第五章第四節で著者は、何もせずにただ共に「いる」ことに立脚するゆるやかで寛容な共同性や、「何も為さない」ことの潜勢力などへと、議論を拡げていく。

本書は、ゲストハウス利用者への微視的な観察から、近代的な社会関係モデルにおいては周縁化されてきた、移動性、一時性、流動性、無為性といった局面の重要性を提起するという点で、「後期近代における他者との関わり」(p.10)全般をも視野に含む、議論の拡がりを感じさせる。個人が地縁血縁や企業組織などの中間集団のくびきから次

第に抜け出して社会関係が個人化し、交通手段の発展により特定の土地への縛りを逃れて自由かつ頻繁に移動できるようになり、デジタル通信機器の進化により対人コミュニケーションの対面性と同時性からも解放されつつある、今日の社会状況の一局面を描く民族誌として、本書は高く評価できる。

そうした後期近代的な状況の極北に著者が見いだした「時限的つながり」が、しかしながら、サイバー空間などではなく、シェアリングエコノミーのゲストハウスという、特定の土地と固く結びついた物理的空間に見いだされるというのは、皮肉な話にも思える。似たような考えや価値観を持つ者が節い集められがちなネット上のコミュニケーションと違って、「ゲストハウスでは別々の身体が物理的移動によって隣接し、同じ場所に居合わせてしまうことによって、見知らぬ他者とのおしゃべりや交流が可能となっている」(p.167)。それがゆえにゲストハウスで紡がれる「時限的つながり」にはある種の包容力があり、都市に住んでSNSに耽溺する日常の社会生活にはない独特の魅力を放つ。ただしこれは、物理的移動を伴う短期の観光旅行の合間でのみ成り立つ儚い泡のようなもので、当事者たちの人生や、彼らを取り巻く社会関係の長期的な有り様に大きな影響を及ぼすものではない。ゆえに、現代社会を批判的に論じるための参照点としてゲストハウスの「時限的つながり」を持ち出そうとすると、やはりそれは日常の構造からの身体の物理的/一時的逃避によって可能となるに過ぎないという限界が、頭をもたげてくる(終章において著者は他にも、内向的なユートピア性やネオリベラルな主体との親和性を、懸念点として挙げている)。結局のところ、観光人類学がその最初期に提示した、観光とは日常の構造に対する非日常の反-構造である、という枠組みに、本書の議論は回収されていくように見える。敢えて辛辣に言えば、(なぜか本書では言及されていないが) V.W.ターナーによる古典的なリミナリティとコミュニティの議論を、その後の理論的な進展を活用して精緻に組み直したのが本書である、と言えるかも知れない。もちろん、旅先での一時的な人間関係の盛り上がりについてコミュニティの概念

を当てはめて満足していた時代からすれば、本書が大いなる進展であることは、強調して余りある。著者が意図する現代社会論としてのさらなる展開を、今後に期待したい。

繰り返すが、本書は「ゲストハウスの民族誌」として良く書けた秀作である。また、社会学、文化人類学、観光学そして哲学などの議論を広闊にレビューし、現場で観察された人びとの行動や社会関係の分析に、適宜応用していく手際も見事である。結果として、古典的なコミュニティ論の当てはめでは不可能だった、事例描写と考察の解像度のレベルアップを実現している。できるなら、コミュニティ論が図式的にはあるが提供していた、なぜ他ならぬ当地でそのような社会関係が生まれるのか/求められるのかについての説明があれば、なお良かったかもしれない。今日、シェムリアップのゲストハウスを訪れる日本人客は、旅先での冒険にも現地文化との接触にも目を向けず、自分探しすらも放り出して、同じ日本人同士の「時間的なつながり」による心地よさと手軽な感動を求める。それは、インターネットなどを通じて、ゲストハウスの魅力がそのように紹介されているからだろうが、そもそもなぜ、日本人ゲストハウスはそのような場として作り上げられてきたのか。シンプルにオーナーたちの経営戦略によるのか、

それとも客の願望をオーナーが汲み取ったのか。後者だとするなら、なぜ客はシェムリアップのゲストハウスにそれを望んだのか。シェムリアップは特別なのか、それともたまたまそういう場になったのか（だとするなら、他地域の日本人向けゲストハウスでも条件さえ揃えばよく似た状況が生じるのか）。

著者は、1990年代以降に若者のあいだで他人との関係性を重視する傾向が強まったことには言及するものの、ではなぜ、日本での日常と同じ原理に基づく社会関係を、わざわざカンボジアに行つてまで再生産しようとするのか。評者の価値観からすれば、せっかくの海外なのだから、現地を楽しみたい。日本人旅行者との出会いや触れ合いなどは二次三の次、何なら無くとも構わない。当地のゲストハウスを今ある姿に導いた、関係者たちの思惑や欲望や価値観、あるいは（おそらく今日の日本においては整いづらい）状況的必然性といったものがもっとはつきりと描かれていれば、古い世代のバックパッカー（の端くれ）である評者も、登場人物たちに十分な共感を持って本書を読むことができたかも知れない。

（市野澤潤平・宮城学院女子大学現代ビジネス学部）